

設楽町分科会

10/12(金)

つぐグリーンプラザ 多目的ホール

パネルディスカッション

田舎で生きよう！～過疎のまちで見つける喜び～



「田舎で生きよう！ ～過疎のまちで見つける喜び～」

コー
ディ
ネー
ター

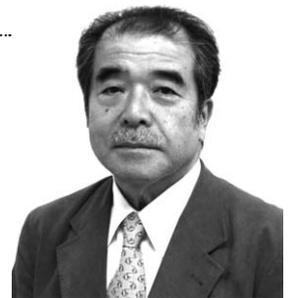
早稲田大学教育・総合科学学術院教授

宮口 侗廸

みやぐち としみち

富山県生まれ。東京大学理学部地理学科、同大学院博士課程に学ぶ。文学博士。1975年から早稲田大学教育学部に勤務し、1985年から現職。自治大学校講師、総務省過疎問題懇談会座長、農水省美の里づくりコンクール審査委員、富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長などを務める。富山市に住み、地方と東京を見つめる生活を25年以上続ける。専門は社会地理学・地域活性化論。

主な著書は、『地域づくり創造への歩みー』（古今書院）、『新・地域を活かすー地理学者の地域づくり論ー』（原書房）ほか。



パ
ネ
リ
ス
ト

神流マウンテンラン&ウォーク実行委員会委員長

宮前 鍬十郎

みやまえ くわじゅうろう

群馬県生まれ。自然などの観光資源を積極的に活用した交流を推進し、2009年7月に神流マウンテンラン&ウォーク実行委員長に就任。強いリーダーシップのもと17団体が加盟する本会を統括し、円滑な大会運営と内容の充実を図り、交流人口の増加及び活力ある地域づくりを基本としたイベントに発展させ、地域の活性化に取り組む。

1979年5月万場町（現：神流町）議会議員、1990年6月同議会議長を経て、1997年万場町長に就任し、以来通算5期15年現職。2011年5月群馬県町村会会長に就任。



田峰観音奉納歌舞伎谷高座前座長

七原 明郎

ななはら あきら

愛知県生まれ。日本大学を卒業後、1972年に設楽町役場へ奉職。1973年2月の田峰観音大祭奉納歌舞伎で素人役者としてデビューした。1973年頃より谷高座席務として座の運営に参加し、1989年から谷高座座長に就任。現在は顧問として、後継者の育成に励む。2005年10月より設楽町教育委員会教育長の任を務める。



ラジオパーソナリティ 設楽町アドバイザー

川本 えこ

かわもと えこ

広島県生まれ。FM AICHIで生ワイド番組「フレッシュ・アップ・アイ」を担当し、ベジタブル&フルーツコミュニケーション（野菜ソムリエ・マイスター）として食の分野でも活動中。

野菜・果物の講演会、カフェ、レストランでの野菜・果物イベント、メニュー考案、食のプロモーション&プロデュースなどを手がけている。

また、愛知県北東部に位置する森の町「設楽町」のアドバイザーとしても活動。長年のラジオ経験で培った取材力を活かし、農山村の魅力を発掘し、広く伝えるために、山間部に頻りに足を運んでいる。



総務省地域力創造グループ地域自立応援課長

牧 慎太郎

まき しんたろう

兵庫県生まれ。1986年東京大学法学部卒業後自治省へ入省。奈良県地方課、消防庁総務課、自治省財政局調整室主査、北九州市企画局調整課長、通産省基礎産業局総務課長補佐、島根県企業振興課長、同財政課長、自治省税務局企画課長補佐、北海道財政課長、総務省情報通信政策局地方情報化推進室長、自治行政局情報政策企画官、兵庫県企画県民部長、総務省行政管理局管理官（文部科学省、法務省、警察庁等担当）などを歴任し、昨年7月から現職。経済財政諮問会議「日本21世紀ビジョン」生活・地域WGメンバーも務めた。趣味は山登り、日本山岳会会員。日本三百名山のうち298座を踏破。



宮口 それでは、設楽町分科会のディスカッションに入ります。テーマは「田舎で生きよう！～過疎のまちで見つける喜び～」ということになっております。今日、二つの表彰事例の発表をしていただきましたけれども、神流町さんは町を挙げて喜びを見出しておられる、そして谷高座は地区で頑張っていて、14名の小さな小学校と共に、喜びを見出しながら歌舞伎の奉納を続けておられるということで、まさにこのテーマにふさわしいご発表であったと思います。

時間も少し押しておりますのできばきと進めさせていただきますと思います。まず、4人のパネリストの皆さんの中で、川本えこさん、今、設楽町のアドバイザーをされていると伺っておりますけれども、二つの発表を見られて、どのように受け止められたか、また、自分が日頃やっていることと、どのように、何かつながるのかというようなところで、7分くらいでお話をいただければありがたいと思います。

川本 ありがとうございます。ラジオで7分という、1コーナー以上の長い時間を頂戴できるということで、いろんな話をさせていただきたいと思います。

素晴らしいお話をうかがいまして、どうもありがとうございました。まず、私は、神流町さん、そして谷高座さんのお話を伺って思ったことは、トレイルランをしたい、歌舞伎に出てみたい、という、まずここですね。今、私もジョギングを始めておまして、トレイルランというのは今、若者に実は流行っております。いろんなところで挑戦されている方も多くて。群馬の方まで、神流の方まで行かれる方は少なかったのですが、今、私が一瞬にして、行ってみたい、ちょっと走ってから、もうちょっとペースを上げてみようかな、と思わされるくらい魅力的なお話を伺いまして、改めてマンパワーというのを今日は、お二方の話を聞いて思いました。

私も毎日、月曜から木曜まで生放送をやっておまして、設楽町のアドバイザーということで、設楽町のお話をできるだけしております。愛知県の方々、皆さんご存知なのかと思っていまして、設楽町は意外にご存知ないのです。とてもショックなことでした。私も、初めて設楽町に来た時に、設楽町の方に言われたのが「この町には何も無いんだ。」何も無いわけないのだけれど、どんなんだろう、と思って町の中をいろいろ案内していただきまして感じたことは、本当に何も無いのです。でも、何も無いというのは、何が無いかというと、都心部にあ



るものが何も無いのです。デパートであったり、集客するような大きなゲームセンターのようなものであったり、そういったものがまるで何も無い。ただ、都心部に無いものが、この町にはものすごくたくさんあるということに気づきまして、ここをできるだけ町民の皆さんに魅力として感じていただきながら、ラジオでご紹介していきたいと思って、いろいろ紹介してまいりました、設楽町のことを。

今からちょっと、お写真を出していくのですが、こちら、面ノ木のブナ原生林です。この原生林、ものすごく美しいのです。設楽町の方でも、なかなか実はここまで、けっこう標高が高いところですので行かない、という話を伺いました。私、こちらの方に伺いましてラジオで話をしましたら、ものすごく問合せをいただきました。なぜ問い合わせをいただいたかということ、こちらの写真ですけれども、実は、私は、設楽町アドバイザーに就任した時に、町長から、このように委任状を頂きました。この時のこの写真、この普通の野原に演台と、マイク、ポータブルスピーカーを置いただけなのですが、これ、何もなかったら、ただの野原なのです。ところがこのポータブルスピーカーを置いたことで皆さんが反応されたのは、私が「アドバイザーになったんですね。」という反応が来るのかと思っていれば、この素敵なロケーションのところにいきたいと、カメラマンの方であるとか、モデルさんが、皆さん、私の友人たちが言ってきました。この見せ方というのも大事だなと思って、町の方に気づいてもらおうと思い、わざとこういうことをしていただいたのです。

こちらの設楽町というのは、今、「お花のある町」として売り出しているらしいやいまして、町には、かなりたくさんのお花がございます。とてもきれいで、よく手入れが行き届いています。このお花ですけれども、お花が



美しい町というのはたくさんあるのですね。ところが、ラジオでこれを紹介したところ、どこに皆さん反応されたかという、「え、これを植えたのは町民の方なんですか。」とお花が綺麗というよりも、そのマンパワーにみなさん感動されるのですね。こちらそうです。こちらマンパワーで植えられたシダレモモ。ちょっと解像度が悪いですが。こういったように、マンパワーあふれる町の魅力を、私は、いつもラジオで紹介させていただいています。

マンパワーといえば、こういう「丸太小屋プロジェクト」というのも設楽町の駒ヶ原というエリアで行っています。これは3年続いていて、100名くらいのボランティアの方が来られているらしいのですが、県内各地からボランティアを募りまして、丸太小屋を作りまして拠点づくりをしていこうと。新たに町づくりを自分たちの素手でやろうじゃないかということで、こうやって定期的に皆さんが集まって、町外の方が集まってこられます。子供たちが、とてもいきいきしているのですね。都心部の小学生たちにお話を聞きましたら、「学校ではゲームが流行っているけれども、ゲームは目が痛くなるから嫌だ。木登りをやっていた方が僕は好きだ。」って、都心部の子が言うのですよ。そして、大人がやっていることを真似したがる。人がやっていることを真似したがる。人のことを見て、人の物真似をしたがり、人の魅力にとらわれていって、結局は「設楽町に来月も来たいから、僕、勉強頑張るよ。」と親御さんにおっしゃるそうです。

やはりすべてはマンパワーなのだのと、設楽町をいつも取材させていただいて感じております。今日も神流町さん、谷高座さんのお話を聞いて、マンパワーが一番大事なのだということ改めて感じさせていただきました。

宮口 ありがとうございました。

いかに設楽町が素晴らしいところかというお話だったと思います。また後で、七原さんに、それを踏まえながらお話をいただきたいと思います。時間をずいぶん節約していただいたようで。

それではもうお一方、パネリストでいらしております総務省の牧課長、今の話、プレゼンテーション等々を踏まえて、またつなげていただければと思います。

牧 みなさんこんにちは。総務省の牧でございます。

今日の二つの表彰団体のお話をうかがわせていただきましたが、私も、実は趣味が山登りでして、日本山岳会会員でございます。40歳の時に日本百名山を全て登りまして、50歳までに日本三百名山を全部登ろうということで、実は明日、この奥の水窪町の山に登って、これが299番目となります。というくらい全国の山に登っているのですが、山というのは単に登るだけでなくトレイルラン、縦走というのが山の醍醐味なのです。私が毎年参加している縦走大会で、川本さんも昔おられた神戸市主催の「六甲全山縦走」というのがあります。56kmのコースを一日かけて、須磨浦から宝塚まで縦走するのですけれども、おもてなしという意味でいうと、途中、ホットレモンや甘酒などのサービスがあるのですが、それに比べてもこの神流町のトレイルランは、すごいですね。おもてなしの心というかこの手作り感。六甲縦走も完走したらちょっとした楯をもらえるのですが、これは金属製の楯です。あれだけの手作り感のある楯があって、写真入りの完走証があり、コース途中にもいろんな手づくりのそばだとか、いろんなものが食べられるなど、本当に心のこもったおもてなしがあり、おそらくファン投票で支持されているのも、トレイルランそのものというよりも、地域の人たちのおもてなしの気持ち、参加者の心を大きく打っているのじゃないかなと感じました。

それから、谷高座さん、私、思ったのですけれども、歌舞伎もさることながら地域の小学校、小学校が地域においてどういう位置づけにあるかということを考えさせられました。今、総務省で、学校を拠点とした地域活性化の事例というのを全国で集めさせてもらっているのですけれども、やはり小学校というのは、どんなに小さな学校であっても、地域のコミュニティの核になりますし、地域の皆さんの心の拠り所なのです。そういう意味で、地域を元気にしていく、コミュニティを活性化

していくという時に、小学校あるいは小学生を、子供たちを中心にすれば地域は、まともな地域だと思います。例えば、何か観光振興しようとか、イベントしようといったときには、どうしても「そんなことやるのか。」と一部反対者が出てくるケースも多いのですが、小学校、小学生、子供たちを中心に、子供たちを巻き込んで何かやっていこうという話になると、地域はまともじゃないか。そういう意味で、地域に残る小学校の役割の大きさというんですか、そういうものを改めて認識いたしました。

宮口 課長、総務省の事業の話は、後でやっていただきますでしょうか。今、お二人からの感想を交えて、地域の価値についてコメントしていただきました。

ここで、事例発表いただきました発表者とは、パネリストが替わっていますけれども、いかにこのトレイルランあるいは歌舞伎、歌舞伎の方は非常に長い間続いているわけですが、スタートから継続まで、いかに苦労されたかというようなことがあろうかと思えます。そのあたりについて改めて、実行委員会の委員長である宮前町長から、お話をいただけませんかでしょうか。

宮前 お世話になります。神流町長の宮前でございます。

トレイルランについて、でございますけれども、まず、この話は先程も事例発表にありましたとおり、群馬県の職員であった鍋木さんから話をいただいた時に、山岳マラソンと聞き半信半疑で、そんなことをやっても、どれだけ人が来てくれるのかな、というようなことがまず心配になりました。しかし熱心に「やりましょう。」と声をかけていただきましたので、とにかくやってみるか、ということで始めました。実施するからには、町の手作りの大会でやりましょうということで、先程もありましたとおり、実行委員会を立ち上げて、様々な策を練って、大会を始めたわけです。

最初は400人弱の参加者があり、それを見て、本当に驚きました。山岳マラソンに興味を持ち、参加したいという人が、これほどいるのかなと、それも全国的にすごく多いなと、そういうことを感じたわけです。ともあれ、まず第一回目を終えたわけですが、その中で、手作りということを中心に掛けて行ったおかげで、参加者の皆様には大変喜んでいただきまして、本当にたくさんの感激のメールを頂きました。また、そのメールの内容に町



民の皆様が感激いたしまして、二回目からは、さらに「おもてなし」をやるという雰囲気になりました。

その中であって過疎問題ですけれども、やはり神流町は、本当に山と川のみで、何も無いところですので、何かしなくてはというような考えもあったわけですが、町の眠っている宝を見つけて、それを磨いて、それを売り出そうというのは、全国どこの町村でも考えられていることだと思うのです。そういう中であって神流町も、いろいろ取り組み、なかなかうまくいきませんが、このトレイルランを実施する中で、「おもてなし」というものがひとつの資源になるのではないかな、という気がつくづくいたしました。

そういうことで、交流人口を増やす取組を、これからいろいろな面で実施していかなければ、何も無いところでございますので、このような「おもてなし」を一つの柱として、これからも取り組んでいきたいなと、そんなふうに思っております。

宮口 ありがとうございます。

今、「おもてなし」が資源だとおっしゃったのですが、私の持論でもあるのですが、人はもらおう、もらおうと思っている時は進歩、成長しないのですね。国にお金くれ、お金くれと言っているのは、地域は成長しないと思っています。しかし、人に何かをしてあげようという時には、いろいろ頭も働かし、人間は成長するのだとよく言うのですが、田舎には土地と人があるわけですね。先程から「何も無い」という言葉が、たまたまいくつが出てきましたけれども、人がいるのですね。その人がパワーアップすれば、私は「三倍パワーアップすれば人口は半分になってもパワーは増える」というのが持論なのですが、今の「おもてなしが資源である」ということで、非常に、改めてそういうことを感



じました。人が喜んでくれるようにできるようになられたわけですね。大変すばらしいことだと思いました。

七原さん、大変な地区で頑張っていて、とにかく続けてこられたわけですが、改めて、この間の苦勞と言いますか、あるいは喜びと言いますか、についてお話をいただけますか。

七原 私どもは、学校を卒業したのが昭和40年代の終わりだったのですけれども、その頃の谷高座の状況と申しますと、本当に後継者がいなかった。我々の親父たちの時代くらいまではあったのですが、その後、ちょっと中断の年代がありまして、なかなか地元で歌舞伎を続けていくということに、今と全く違う反応がありまして。この辺で言うのですけれども「芝居を踊る奴は物好きだ。」とかです、そういうことを言われた時代でした。

当時まだ、過疎対策とか、そういうことは全く頭にありませんでした、せつかく300年以上も続いている、この伝統の灯を我々の世代で消したくない、という思いが強くなりまして、なんとかしたい、ということで帰ってきました。今、設楽町の議長をやっておりますが、当時は郵便局に勤務してございまして、そこへ相談に行きました。なんとかやりたいと。そしたら、当時7幕くらいあったのですが、「3幕か4幕作ってこい、そしたら…」というようなことを言われまして、それから始めました。そこから始めていったのですが、とにかく人がいなかったので、先程、座長がやりましたように、一年に、三番叟を含めると一人6幕くらい出るので。6幕出ますとね、台詞がこんがらかりまして、前の幕と同じになったりなんかすることがあるのですが、そういうふうにした。それから、近隣の地域から芝居を踊ってくれる人を募ってきて、やったりしたのです。

さっき挨拶した町長も、実は一度だけですが舞台に出たことがあります。けっこう上手だったのですが、一回で懲りて二回目はありませんが、あったのです。そういうことをしておったのです。

50年代、先程座長は52年と言っておりましたが、これも私の前の座長の熊谷さんの提案で、小学校の子供たちの幕を作ったらどうだ、ということになりまして、当時は5、6年生で一幕やる、2年生に子役をやらせるというやり方で、10年くらいそれが続いていたと思います。それで、小学校の人数がどんどん減ってくるということがありまして、この際、学校全員出したらどうかということで、低学年と高学年とで全員が出られるように、ということになりました。そうしますと、親も来ますし、おじいちゃん、おばあちゃんも来るし、けっこう見る人が増えてくる。見る人が増えてくると田峰観音のお祭りにもぎやかになってくる。そうすると観音様も力を入れてくれるようになりますし、いよいよ動いていった。

そこへ、過疎対策として総務省の方から、地域芸能といひますか伝統芸能の伝承を使つての地域振興みたいな話が重なつてきまして、そういうことを一緒にやってきました、今日まで続いた。今、けっこう若い人が学校を出ますと、谷高座に協力してくれます。仕事の関係で新城、豊橋なんかに住んでいても、その時期になると歌舞伎をやりに戻るといふようなことがありまして。油断はできませんが、当分の間は大丈夫かなというふうな気がしております。今、先程の座長から下の年代に、けっこう一生懸命やる連中がおりますので、我々の目の黒いうちは続かなと。ぜひ、続けてほしい、今後も一生懸命やっていきたいと思つております。

宮口 ありがとうございます。

やはり、高度成長真っ盛りの頃には、かなり「こんなことやってるのは物好きだ。」と言われたということですね。今まさに、価値観の転換と言いますか、そういう美しいものをみんなで大事にしよう。必ずしもそれは、規模が大きくなっていいのだ、というような風潮がかなり出てきております。私、実は、全く知らなくて、この表彰の候補に挙げていただいたので、自分で視察に來たわけですが、本当に驚きました。このことが全国に知られば、おそらく、相当ファンが出てくる。群馬の山の中を走る人も何百人もいるわけですね。そういう時代ですから、ここへ歌舞伎を見に来るといふ人も、おそらく何百人くらいは出てくると思つております。

意味では、それこそ、外からのサポートという話が、昨日からやられていますけれども、ぜひ、そういう方向に行ってほしいなと思っています。

それから、小学校の先生たちはどうなのですか。小学生を出して。先程、舞台にも出ておられるようなのですが。

七原 小学校の先生も、特別な事情のある人以外は舞台に出てもらっています。けっこう若い先生なんかは喜んで出ますし、上手にやります。校長、教頭くらいになると融通がききませんので、あまり、先程、座長が苦しい言い方をしておりましたが、場を引き立てて、やってくれた、とかなんとか言っていましたけれども。そのようになりますが、若い先生は上手ですね。本当に上手になる、やっているうちに。

宮口 じゃあ、歌舞伎ができるなら、ということで田峯小学校に異動を希望してくるような人はまだいませんか、そういう人は。

七原 逆の人は聞いたことありますけれど。田峯小学校だけは行きたくないということを言う先生がいるとは聞いたことがあります。そういう先生は普通の先生ですね。いい先生ではない。普通の先生だと。

宮口 人間、向き不向きというのがありますので、そういうケースは当然あるとは思いますが。昭和50年代、52年とおっしゃいましたか、小学生を仲間に入れて頑張ろうと、すごい決断というか、非常に早い時期に手を打っておられるとか。それから宅地造成もそうですけれども、中の人がみんな頑張って安く上げたということですが、議論は、すぐ決まったのですか？

七原 平成の一桁の終わりの頃だったと思うのですが、夏休みの始まった頃かなんかに、PTAの作業がありまして、その時に、ご苦労様会で、職員室の前に風通しのいい場所があり、そこでビールを一杯飲みながら話が弾んで、その中で、将来の子供の数がこの先まだ減っていくと。このまま手をこまねいていると本当に、今でもそうですけれども、存続が危ないということがありまして、話をしている中で、自分たちで造って売りだして、小学生より下の子供、田峯小学校に入

学する歳の子供がいる家に限って売るということでうだと。安く売って、人口を増やしたらどうだという話が出ました。

当時、PTAの力では限界がありますので、田峯の長老グループといいますか、財産区というのがあって、そういう人たちとか、区長さんに相談をしたわけです。そしたら、当時、蒲郡市と田峯区との交流が始まったばかりで、「市民の森」を設置するというので、委託料といいますか管理委託料が5,000万円だったと思います、入っていたのです、財産区に。そこで、そのお金を流用させてくれると。そのかわり宅地が売れたら返しなさいということで、原資ができた。不足の部分は農協に頼んで融資してもらって、これは返済しますということで、先程、座長が発表の中で言っておりましたが、17区画を造って今、14世帯が入っていて、一応借金だけは全部返しました。財産区に返済するお金ももう残っていないと思います。もう戻したと思います。

宮口 凄いですね。

七原 さっき言った「21世紀委員会」というもの、今は、宅地が売れたときにお金をというだけで、お金そのものは、財産区に戻すようにしておりますので、そういうだけの団体になっておりますが、当時は、日曜日のたびに出たりしたものです。

今日もこの場へ、いらっしゃっていると思いますが、当時の校長先生は作業の途中で切り倒した竹か木材を足の上に落として、そんなことがあったりですね。後で気がついたら、あのと時妊娠2か月か3か月だったというお母さんも頑張ってやって。先程、歌舞伎をやりました、その子供が。その時にお腹にいた子が今、歌舞伎をやるという年代です。



これからということで、宅地をうんぬんという話は、まだちらほら出ますけれども、これは、また地元へ帰って長老の皆さんとよく相談せにゃいかんというふうに思っています。

宮口 どんどん、議論が進んでいったという感じですね。

川本さんどうですか、今の二人の話を聞かれて、ご自分の地域に対するお考えなど。

川本 もう、パワフルですよ。ひとつの目的に向かって町が一つになっていくというのは、非常に難しいことではあると思うのですが、マスコミの端っこの方に、私もいますので、こんなことを言うのもおこがましいですが、マスコミというのは数字が取れる情報を扱いたいのです。人々が知りたがる情報を流したいと思っているのです。ですので、今、お話をいただいようなことを、ぜひ、もっともっと声高に言っていただきたい。もちろん、トレイルランも楽しそうだし、参加してみたいと思いますし、歌舞伎も素敵ですし、見に行きたいと思うのですが、それを作る裏側のサブストーリーというものの、バックグラウンドをもっともっとお話になると、例えば「田峯の歌舞伎に出たいんだ。」じゃなく、「田峯の歌舞伎を作っている方々と共に生活をしたんだ。」と思うように、マスコミに取り上げてもらえるような、そんなPRのしかたを、私自身もアドバイザーとして考えていきたいと思いました。

宮口 まさに何かをやる裏側に、人が必ず働いていて、そこまで全部さらけ出すとファンがもっと増えるんじゃないかというようなご指摘でしょうか。要するに、人間の生々しい姿をもっと。特に都市の人たちは、田舎で生きる生々しい姿を、力とか、そういうものに感動したり、触れたいなと、今思っているんじゃないかと。そういう時代の流れですよ。ありがとうございました。

それでは牧課長。

牧 今のお話をお聞きして、実は私、15年余り前に鳥根県庁に勤めていたことがあるのですが、その時のことをちょっと思い出しました。鳥根県では、当時、かなり道路整備に力を入れていて、道路が立派に

なると実は、便利になって人口が増えるかという逆に、立派な道路でつながってしまうと、どんどん、みんな都市部に移り住んでしまうという現象が進んでいました。特に、鳥根県の出雲市から西側の地域で、根こそぎ人が減っていく集落が増えていったのです。ただ、一方では若い人たちが残っていて、出雲市なり都市部に通勤している集落もある。移り住んでしまう集落と、若い人たちが残って頑張っている地域に住んで通う人たちのいる集落の違いは何かというのを実は調べてみたら、一つポイントがあったのです。それは何かというと、お祭りです。

鳥根県の西部は石見神楽というのが盛んな地域で、世界的に公演に行ったりするような素晴らしい伝統芸能なのですが、その石見神楽の強いチーム、海外公演なんかに行くようなチームがあるところの集落は、そのチームに入っていること自体が誇りであり、プライドであり、生きがいなのです。そういう神楽のチームが強いところは、みんな頑張って、地域に住んで、ちょっと通勤は遠いけれども都市部に車で通うと。

一方で、お祭りがだんだん弱ってきているところは、根こそぎ、都市部へ若い人が移り住んでしまうという傾向がありました。実は、このお祭り、特に、子供たちが自分たちも参加したいと憧れるような祭りがある地域というのは、コミュニティとして非常に強いし、根こそぎ、若い人たちが「やっぱり都市部がいいな、便利だな。」ということで移り住むことが少ないのではないかと、いうことを改めて感じました。

それと神流町のほうで、一つ、これからの活性化のポイントとしてやはり、人口が減っていく中で交流人口というのは、非常に大きなパワーを地域にいただけるのかな、ということで。後程、もし時間があれば、総務省が交流人口に着目した施策、あるいは外部からいろんな人たちに移り住んでもらうという施策を紹介させていただきたい。

宮口 今やってください。

牧 よろしいですか。そうしたらスライドの方、お願いします。総務省では、地方で都市部の機能を一定程度利用しながら、周辺地域が一体となって定住の受け皿を作っていこうという「定住自立圏構想」という施策を進めています。実は、財政措置もけっこう手厚くありまして、中心的な都市に4,000万円、周辺の市町

村に1,000万円ずつ、特別交付税を上乗せで配分する。あるいは外部からいろんな人材を呼ぶときには、年間700万円の助成があるとかですね、あるいは地域医療関係で上限800万円の財政措置があると、こういう施策を講じております。

実はこの「定住自立圏」というのはどちらかという、周辺の地域から都市に通勤する人たちを想定していたのですが、逆に、この新城とこの後背地、設楽町と周りの地域がそうなのですけれど、実は自然が豊かな地域の中でもいろんな働く場所があるということで、都市に住んで周辺地域に通うという人口の流れ、人の動きがあるのじゃないかということで、こういう自然の豊かな地域が後背地、バックグラウンドにあって都市から通っているようなエリアについても圏域を一体的に捉えて、定住の受け皿として振興策が検討できないかということ、今、研究会を作ってやっています。

全国的にどういうところがそうなのかという、例えば富士吉田市を見ていただくと、富士吉田市というのは大きな都市なのですが、昼夜間人口を見ると、昼間と夜、どちらが、人口が多いか、富士吉田市は昼夜間人口比率が0.98なのですね。夜、住んでいる人が多くて、昼間働きにどこかへ行っているのです。みんなどこに行っているのだろう、と見ると、山中湖村だとか河口湖町だとか軒並み昼夜間人口比率が1を超えている。要はですね、富士山麓のリゾート地ですから、働く場所がたくさんあるのです。ただ、国立公園ですから規制もあったりして、どんどんアパートを建てて人口を増やすようなエリアではないので、富士吉田市に住みながら実は周辺の市町村に通っている人が多い。それで、都市なのに昼夜間人口比率が1を切っているのです。

実は、新城のエリアもそうでした、例えば設楽町を見ていただくと、設楽町で働いておられる方、全部で2,342人いるのですけれど、実は、そのうち311人の方は新城に住んで設楽の方に通ってきている。あるいは、東栄町を見ても、1,153人のうち13%、だいたい7、8人に一人は新城に住んで後背地に通ってきている。こういう人の動きというものに、新たに着目させていただいておまして、こういう過疎地域は、村や町が単体として、自分たちだけで考えるのではなくて、都市との交流人口、働きに来る人も含めて、人々は実際に圏域のなかで一体的に動いているのですから、こういうことに着目した広域圏の振興策というのを今後検討していきたいと思っていますので、ぜひこの会場にご参加の方も、



この動きにひとつ注目していただければと思います。

それからもうひとつは、実際に働きにくるというだけではなくて、あるいは観光客が来るということだけでなく、「地域おこし協力隊」という制度を、総務省が3年あまり前に創設しました。これは大都市部の、特に若い人たちが一だいたい8割くらいが、20代30代です—こういう人たちに年収200万円で最低1年間、最長で3年間、過疎地域だと離島に住んで地域活動に携わってもらった。昨日の全体会でも「耕すシェフ」という、島根県邑南町の女性の方がおられましたが、あの方も「地域おこし協力隊」です。実はこういう方々が全国で今470人以上おられます。そういう人たちが、実際に年収200万で地域に入って、3年間地域で頑張ると、そのうちなんと67%が定住している。こういう大きな成果も上がってきておりますので、ぜひ交流人口の拡大、それから「地域おこし協力隊」というような仕掛けも活用して、ぜひ過疎地域においても持続可能な将来明るい方向への展望をぜひ見出していきたいと思っています。以上でございます。

宮口 ありがとうございます。

先程、七原さんも「流出した人が歌舞伎には戻ってくる。」と。だから、その人は、どこに住んでいてもいいわけですよ。その人は、そこで、うまく給料をもらっているのであれば、それは、そのこと自体悪いことじゃない。必要な時に来てくれる人というのが、私はまあ、住民と同じだというふうに考えてもいいのではないかと思います。今、課長がおっしゃったのは、逆のケースですね。山の中の観光施設なんかで、人が必要だけれども、地域に必ずしもそれに合う人がいないケースも今、出てきていますね。ですから町の方から通うということも大いに進めていいのではないかと、というお話があった

と思います。

というわけで、私は、私自身もどこに住んでいるかということよりも、その地域にどうやって貢献してくれているか、という発想の方が大切だと。そういう人がたくさんいれば、人口はだんだん減っていくのだけれども、それなりのパワーというのが出てくるのかなあ、というふうに受け止めております。

今日は、後がつかえておりますので、時間を延ばすわけにはまいりません。それでは、皆さん、ちょっと話足りないと思うのですが、ここで会場から、せっかくですからパネリストの方々に質問があればお受けしたいと思います。いかがでしょうか。パッと手を挙げていただければありがたいですが。おられませんか。

会場 今日は貴重なお話をありがとうございました。今日、話を聞いてちょっと思ったのですけれども、そういった奉納歌舞伎だとかマウンテンランに参加された方たちの中で、実際にその場で暮らしたいと思った方たちというのはいるのか、ちょっと興味を持って、聞きたいなと思いました。

宮口 まず神流町の方で、このトレイルランをきっかけに、ここで暮らせないかとか、あるいは暮らしたいというような話が、どの程度あるのかという質問です。町長のところまで聞こえていっているかな。

宮前 トレイルランには、多くの方に参加していただき、リピーターで来られる方は多いですけれども、なかなかそこまで、住みたいという人はあまりいないように思います。本当に、いろいろな面で、先程の事例発表でありましたとおり、試走に來たり、登山道の清掃に來たり、なにか神流町に対して活力を与えたいな



という人はいるのですけれども、なかなか来て、住みたいというような人はあまりいない気がいたします。もしいたとしても、神流町に来て住むというのは大変で、いろいろな支障があるのではないかな、そのように思っております。Iターンも森林組合関係でありますが、急峻な山で林業の仕事も大変厳しいので、入れ替わりが激しいような状態であります。神流町を気に入り、少しでも多くの方が住んでくれればいいな、そのようには思っていますが、なかなかそこまでは結びついていかないのが現状です。

宮口 ありがとうございます。

私の勘では、あの山道を走りたい人は、やっぱり都会人的な人ではないかなと。田舎の人が、そんなパワーがあったら、畑で汗かいたほうが良いのではないかと。そういうタイプが、田舎に住みたいのではないかなと思ったりしました。

田峯の場合はどうでしょうか。

七原 交流人口ということでは、お祭りに來るといことと、田峰観音に対する近隣の皆さんの認識というのが、最近、特に高くなってきて、けっこう、お参りをする人がいるということはあると思いますが、観光をきっかけに住もうというのは、まだ聞いたことがありません。

先程、宮口先生が「外から來るファンを大事にする」と、確かにそれもその通りなのですが、町長、副町長がおりますので代わりに言いますと、やはりね、人口を増やすというのは地方交付税に関わってきますので、設楽町に住んでもらうのが大前提かなということをお思います。

宮口 地方交付税の算定というのは総務省の問題にもなりますけれども、どこかがたまたま増えることはあっても、普通の過疎の町や村が増えるということは、普通ではないことですね、残念ながら。昨日も山崎さんの話もありましたけれども。その中でどういい状態を作っていくか、ということがやはり大事だと思います。

川本さんと牧さん、一言ずつ今日のパネルディスカッションについて、感想でも何でもいいですから。

川本 私は「設楽町アドバイザー」ということで、ア

ドバイザーというとか偉そうな感じに聞こえるのですけれども、「したラバー」と勝手に一人で呼んでおりまして、設楽が好き人間という「したラバー」。

本当に、設楽町に通い始めて、みんなもちろん子供の頃から山村地域で育っているものですから、ふるさとのようで、とても素敵なもの、大好きな町であるに違いないと思っていました。実際に通わせていただいて、自分、ふるさとよりも大好きになってしまっている、と。その大好きになってしまった心を、今、まずはリスナーの皆さん、それから友人を招いています。この間、リスナーの皆さんをバスツアーにご招待して、設楽町にお越しいただいたのですが、皆さん、子供さんたちが設楽町を大好きになっていらっやあって、「初めて山登りをした町が設楽町である」というふうに刷り込みました。そして、「天狗なす」という非常に大きいナスを収穫体験していただいたのですが、子供たちがそういう収穫をしたのが初めてということで、なんと、収穫したナスをその日の晩、抱いて寝た、という子供もいるくらい。そのくらい子供の頃から刷り込んでいこうと、いうことをこれからも頑張っていきたいと思えます。

「過疎は今、流行の最先端」だと思ってマスコミで、端っこですけど、伝えていきたいと思えます。今日はありがとうございました。

宮口 どうもありがとうございました。では牧課長。

牧 先程の会場からの質問の中で、実際に自然が好きだという人が、じゃあその地域で住めるか、と言ったら、決定的に困るのが、収入が得られないことです。働く場さえあれば住みたいって人は多いのですが、それをブレイクスルーしようとしたのが、実はこの「地域おこし協力隊」という仕組みです。年収200万円で、活動費が150万円、これは特別交付税で上乗せ措置をさせていただきますけれども、この年収200万円だと東京では絶対暮らせないですね。ただ、過疎地域や離島に「地域おこし協力隊」として行くと、野菜だとか、いろんなお魚だとか、食べ物はだいたい地域の人たちが、差し入れをしてくれるらしいです。昨日の全体会でも「月収14万で10万貯金することができる」という話がありましたが、これが地域における暮らしなのですね。

そういう意味で、実はこの10月23日にフジテレビで、四国の四万十を舞台にして「地域おこし協力隊」の、

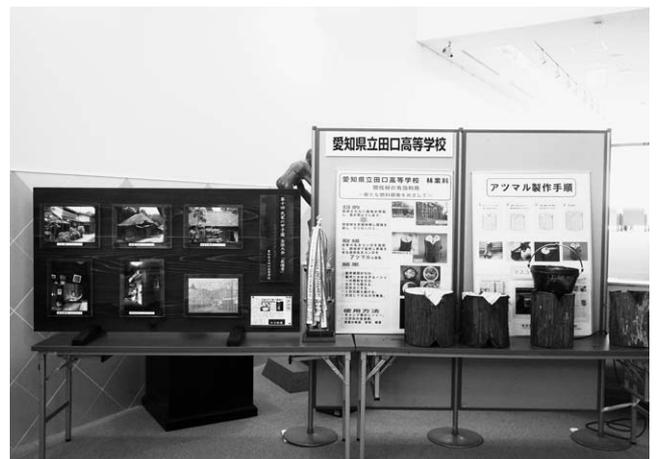
生田斗真君という俳優が主人公になって、真木よう子という大河ドラマ「龍馬伝」に出た女優も出るドラマが始まります。「地域おこし協力隊」をテーマとしたドラマが始まったら、けっこう若い人たちの中で「こういう暮らし、やってみたい。」という人がたくさん増えてくるのかと。その中には、本当にやる気のある、いい若者もこれから出てくると思えます。

愛知県庁の方に、昨日お伺いしたら、あまり「地域おこし協力隊」の制度をご存知なかったようなので、ぜひ、この圏域でも「地域おこし協力隊」を大いに活用いただければと思います。以上でございます。

宮口 かなり今日は、総務省のアピールにもなりましたけれども、ありがとうございました。それでは時間になりましたので閉じさせていただきます。

過疎地域にはよく、何も無いところだ、と言われます。しかし、そこで、長く、ちゃんと生きてきた、あるいは自然を使い、生きてきた人たちがいる、それが、大変なパワー、能力なのですね。そういうことに対して、私は、ちゃんと評価すべきだと。その人たちは、人を喜ばせてやることができる、家に泊めてやることもできる。神流町で579名が宿泊、すごいことですね。ここに宿が10軒、20軒、30軒あると「あの宿だけが儲けるから。」と言ってあんなふうに盛り上がりなかったかもしれませんね。

そういうふうに自分たちが持っているもので人を喜ばせてあげることができる。この歌舞伎だって培ってきた技であります。そういうふうに、神楽の話も出ました、そうやって自分たちが喜び、人を喜ばせることができる、そういう人たちがいるということが、私は過疎地域の地域資源の基本であると、そういう人たちのパワーをうまく組み合わせるといのが地域の活性化だろうというこ



とを、長らく申し上げてきました。今日のお話も比較的
そのような線で理解できたのではないかと思います。

時間ありませんので、これで、今日のパネルディス

カッションを終わらせていただきたいと思います。どう
もありがとうございました。